

風土記の丘の花だより⁶⁰

今、そしてこれから見られる植物(11月7日)

大池の水鳥が増えてきました。カルガモ、マガモ、ヒドリガモ、オオバン、コガモなどが見られます。次は、双眼鏡を持って散歩においでください。早いものでもう立冬ですね。暦の上では冬ということですが、紅葉はまだ始まったばかりです。



先日、大日山35号墳から、金竜大神に行く坂道の降り口でノコンギクを見つけました。ヨメナとそっくりの花なので、今まで見ていたのに気づいていなかったかもしれません。この株もはじめは「なんだヨメナか」と通り過ぎるところでしたが、あれ？なんか違うぞと思い花びらをちぎると、やっぱり付け根に毛がたくさん生えていました。



オレンジ色のきれいな花を咲かせていたヒオウギの実が黒光りしています。これは「ぬばたま」と呼ばれます。それで、万葉集では黒、夜、闇など黒いものの枕詞(まくらことば)として使われています。たとえばこんな歌があります。「居明かして 君をば待たむ ぬばたまの 吾が黒髪に 霜はふるとも」好きな人を待ち続ける切ない気持ちが詠まれていますね。ぬばたまとは対照的に真っ赤な実もあります。サルトリイバラの実です。この植物はかつてユリ科に分類されていましたが、新しい分類体系ではサルトリイバラ科として独立しました。和歌山市周辺では「さんきらい」と呼ばれることが多いかも知れません。五月の節句の柏餅はこの葉で挟みます。この辺りにカシワの木がほとんど生えていないからでしょうか。茎に刺が多く、この藪にお猿さんが入ったら出て来られないということから名付けられたそうです。



最後はシダです。このシダはコシダといいます。名前ほど小さいことはありません。30cmほどはあります。葉につやがあり。茎は硬く木のようです。前回紹介したウラジロとともに、林床に生えるごく普通のシダですが、ここではそれほど見かけません。松下

風土記の丘の花だより⁶¹

今、そしてこれから見られる植物(11月15日)

園路でシイの実を拾っておられる方に出会いました。もうそんな季節になったのですね。シイの実はそのままでおいしいですが、フライパンで煎ったら更においしいですね。園内のものは小さくて丸いつぶらジイというシイです。



チャノキ

お茶の花が咲いています。標準和名はチャノキです。ツバキやサザンカと同じツバキ科の植物です。花や実を見れば、それも頷けますね。その昔、僧栄西が中国から持ち帰ったと伝えられています。お茶は、世界各国で飲まれています。紅茶も日本茶も元は同じこの木の葉を使っています。

白くて小さなキッコウハグマの花が咲きました。



キッコウハグマ



西側の将軍塚への近道を 10m ほど登ったところですが、足元が危ないので、あまりお勧めできません。写真で観賞してください。花茎の上の方の細長いものは閉鎖花(へいさか)といって、開らないまま種子ができる花です。

キッコウとは亀の甲羅「亀甲」のことで、葉の形がそれに似ていることにより



ヤマコウバシ

ます。ちなみにハグマは「白熊・はくくま」のことだと言われますが、さてどうでしょうか・・・万葉植物園では、ヤマコウバシがきれいな黄色に色づいています。以前に「受験のお守り」として落ちない葉のことを紹介しました。紅葉ではほかにサクラ、ケヤキ、ハゼノキ、トチノキ、そしてもちろんイロハカエデなどがきれいです。



マメツタ

最後はシダです。この円い葉のシダはマメツタといいます。石垣や木の幹などに張り付いて生えます。所々に細長く伸びた葉がありますが、それは孢子を付ける葉です。万葉植物園の西の道沿いにあります。名前も「なんとかシダ」ではなく、姿もこんな感じだし、シダらしくないシダの代表みたいですね。松下

風土記の丘の花だより⁶²

今、そしてこれから見られる植物(11月22日)

寒冷前線が通過し、久しぶりの雨で少し潤ったと思ったら、この寒さと風。イチヨウやケヤキ、クヌギなどの葉がたくさん落ちてしまいました。



寒い北風の中でヒイラギの花がひっそりと咲いていました。修復古墳のヤドリギを目印に下りていった辺りにあります。ヒイラギは木偏に冬と書くだけあって、寒くなる今の時期に花が咲きます。葉の刺が特徴的で、クリスマスや節分に飾るので、よく知られている木です。木が若いうちは刺がハッキリしていますが、老木になると人間と一緒に(?)丸くなり、刺がなくなります。



トウネズミモチの実がたわわに実っています。トウは「唐」のことで、庭木や街路樹として中国から持ち込まれたことによります。日本にはもともとネズミモチが生えていますが、それよりも実が大きく、数もたくさんです。高速道路の分離帯などにもよく植えられています。鳥が運んできたのか、風土記の丘でもたくさん見られます。



ツタの葉が紅葉しています。唱歌「もみじ」に歌われている「かえでやつたは」のつたです。名前はよく聞くけど余り知られていない植物です。木に巻き付く植物でよく似たものにキツタがあります。これはウコギ科の植物で、冬になっても葉は緑色です。ツタはブドウ科です。この写真は万葉植物園のカキノキに絡みついていた物です。この北風で葉がたくさん落ちることでしょう。



最後はいつものように「わかりやすいシダ」です。木や石垣などに生えるノキシノブです。ウラボシ科です。葉の裏に丸い物が並んでいるので「裏星」です。それは孢子嚢でそこから孢子を飛ばします。シダ植物ですから花が咲かず、種もできず、孢子で殖えます。シダもこれで10種類目ですね。 松下

風土記の丘の花だより⁶³

今、そしてこれから見られる植物(11月29日)

ずいぶん冷えてきました。早いものでもう師走ですね。あれだけ咲き誇っていたツワブキもリュウノウギクも花の盛りを過ぎました。冬がそこまで来ていることを実感します。



アメリカイヌホオズキ

小さくて白いアメリカイヌホオズキの花があちらこちらで咲いています。名前でわかるように外来植物です。花を見ると何か野菜の花と似ていませんか？トマトや、色は違いますがナスの花に似ていますね。お互いナス科の植物ですからよく似ているのです。花の後には黒っぽい実が出来ます。イヌホオズキという植物もあって、郊外に行くとたまに見かけます。



ヒヨドリジョウゴ

万葉植物園のハギが植えられている竹の囲いにヒヨドリジョウゴが巻き付いて、きれいな実がぶらさがっています。ヒヨドリがこの実を食べると酔っぱらったようになることから名付けられました。それはこの草に含まれる毒性分によるものです。ナス科の植物には有毒なものが多いです。でも、まさか、ヒヨドリが本当にこの実を食べて酩酊するとは考えられません。命名に遊び心を感じます。



ヤツデ

旧小早川家の南側、一段上がった広場の水道の近くでヤツデの花が咲いています。ピンポン球ほどの大きさの花がたくさん付いています。ヤツデはウコギ科の植物で、同じ仲間ではウドや刺だらけのタラノキなどがお馴染みですね。手のひらみたいな形の大きな葉ですが、「八つ手」ではありません。8は偶数ですから、それでは真ん中がとんがりません。奇数のはずです。ヒマな方は確かめてみてください。



フモトシダ

最後はシダを紹介します。今回は「どれも同じに見える」シダらしいシダです。名前のように山のふもとや道沿いごく普通にみられるシダです。葉の表面にあまりつやがなく、先はそれほど細くなりません。1メートルほどにもなる大きなシダです。松下

風土記の丘の花だより⁶⁴

今、そしてこれから見られる植物(2020年12月6日)

早いもので、今年もあと一月を切りました。いつもとは違う年末年始を迎えることになりそうです。でも野山の草木はいつも通り、今の季節の姿を見せてくれています。



ナルトサワギク

左の花は「今の季節の」というものではなく、それこそ「年がら年中」咲いています。この黄色い花はナルトサワギクです。実は特定外来生物に指定されていて、栽培したり販売したりすると~~ン~~百万円の罰金とか。でもそんな物騒な話はさておき（ホントはさておいてもらっては困りますが）花だけを眺めることにしましょう。



メリケンカルカヤ

風にゆれる細長い草はメリケンカルカヤです。名前からわかるように外来植物です。でも、もうすっかり日本の風土に馴染んでいる感があります。独特の薄茶色の色合いと、冬になっても株のまま突っ立っている姿が特徴的です。花が終わったあとたくさんの綿毛を飛ばすので、あちらこちらで群生が見られます。昨年の安藤塚の群生はきれいでしたが、今年は草刈りの時期の関係か、そんな光景は見られません。



ゴンズイの赤が所々に目に付きます。ご承知のようにゴンズイという魚もいます。いずれも「役にたたないもの」という意味があると聞きました。將軍塚近くの展望台から左少し下に大きな木があります。接近して撮影できませんので、この写真は別の所で撮ったものです。赤いのが萼で、黒いのが実です。最後はシダです。



クラマゴケ

今回は「シダらしくないシダ」です。クラマゴケです。今の季節はうっすらと紅葉しています。地面や道沿いの斜面などに生え、枝分かれしながら茎をのびし、覆い尽くすように生えます。「ビッシリ生えている」という表現がピッタリです。一枚の葉が2mmほどのとても小さなシダです。 松下

風土記の丘の花だより⁶⁵

今、そしてこれから見られる植物(2020年12月13日)

「花だより」とは言うものの、これからの季節、花を探すのが大変です。そんなわけで今回、花はありません。悪しからず。

東側にある移築民家旧谷山家住宅の庭の植物を紹介します。この竹はスハウチクです。南方系の竹で「バンブー」と言われる仲間のホウライチク的一种です。薄黄色の地に緑色の縞模様が入るきれいな竹です。庭の南側の山裾に植えられています。風土記の丘にはこの竹のほかに、大きなモウソウチクやマダケが植えられていて、野生ではメダケや、ネザサなどが見られます。



スハウチク

いい香りの白い花が咲いていたクチナシに今、オレンジ色の実がなっています。クチナシの実が食品の着色に使い、きれいな黄色に染まるそうです。それで、栗を煮る時や、やたくあんを漬ける時などに使われたそうです。(いまでも使っているのでしょうか?) この実は割れることなく、割れそうな口も見当たらないので、「口無し」となったそうです。話は少しそれますがこの実の色を「オレンジ色」と書きました。かつては「橙色」「山吹色」「朱色」「柿色」など、いろいろな色に分けていましたが、今はこんな色は何でもかんでもオレンジ色になってしまいましたね。ちょっと寂しい気がします。ところでクチナシの実が本当は何色なのでしょうね。



クチナシの実



アオキ

アオキの実が赤です。写真は未熟ですが、この花だよりをご覧になる頃には真っ赤に熟していることでしょう。ヤマブキの枝にトキリマメが巻き付いています。赤い鞘が割れて中から真っ黒な実が2つ顔を出しています。トキリとは「吐切り」と書きますが、吐き気を抑える薬効でもあるのでしょうか。よく似たつる草にタンキリマメがあります。こちらは「痰切り」名前も姿もとてもよく似た「お豆さん」です。(今回、シダはお休みさせていただきました。) 松下



トキリマメ

風土記の丘の花だより⁶⁶

今、そしてこれから見られる植物(2020年12月20日)

先の寒波は本格的でほんとに寒かったですね。真冬みたいでした。そんな中でも花は咲いていました。前は花を紹介できず申し訳ありませんでしたが、その反省のもと、今回は、北風の中でも震えながら咲いている花を見つけました。



シロツメクサ



ノアザミ



トキワハゼ



ヒメジヨオン



スイセン



ホトケノザ

なんと、さがせばあるものです。それぞれの花がどこに咲いているかはスペースの制約もあって、紹介できませんが、散歩の途中、気にかけているとけっこう咲いているものです。写真の他にも、タネツケバナ、コナスビ、セイヨウタンポポ、イヌガラシなどいろいろな花を見ることができます。もちろん、春のようにたくさん咲いてはいませんが、寒い中を歩いていてこんな花を見つけると、なんとなくホッコリした気分になりますね。スイセンはさておき、今頃咲く花を「狂い咲き」という人がおられるかも知れませんが、



オニヤブソテツ

何も狂ったわけではありません。この花は、今こそが咲く時と咲いたのです。そんな花をあたたかく見てやってほしいものです。では、最後に前回お休みしたシダを紹介します。オニヤブソテツという、ちょっといかめしい名前です。海岸に近いところに多いような印象がありますが、風土記の丘にも少ないながら生えています。これは万葉植物園に生えている一株を撮りました。真ん中より少し上、ちょっと右側に生えています。

松下

風土記の丘の花だより⁶⁷

今、そしてこれから見られる植物(2020年12月27日)

いつもとは違う年末年始を迎えることになってしまいましたが、こんなことがなかったら、「普通の日常」に感謝することもなかったでしょう。令和3年こそ良い年でありますように。ではお正月でもありますし、おめでたい「松竹梅」を紹介します。



まずは松です。写真はクロマツです。風土記の丘には他にアカマツが自生し、大きなダイヨウショウ(大王松)が植えられています。松は古来より常緑で長寿、姿形が良いことなどから、縁起の良い木とされてきました。マツは「待つ」、つまり「神様を迎え待つ」ということから名付けられたそうです。聞くところによると、ここのマツは何年か前のマツク

イムシの被害で大部分が枯死したそうで、10メートル以下の小さな木が目立ちます。



左に竹の写真が2枚あります。同じように見えますが、節のところの横の筋を見てください。左は1本ですからモウソウチク、右は2本なのでマダケです。だいたいモウソウチクの方が太

いですが、細いモウソウチクは節を見ればすぐにマダケと見分けられます。



最後は梅です。見ごろまでにはあと少しかかりそうですが、早いものはそろそろ咲くでしょう。万葉植物園や修復古墳の西側などに梅園があり、紅白の花が楽しめます。これは昨年度の写真です。



今回もまたシダを紹介します。一目でシダとわかる「シダらしいシダ」です。名前はベニシダ。若葉の頃、きれいな紅色なのでこの名前が付いています。普通に見られる大きなシダです。専門家は「なんとかベニシダ、かんとかベニシダ」と細かく分けていますが、散歩の途中でそれを区別する必要もないでしょう。どれもベニシダにしておきましょう。

松下

風土記の丘の花だより⁶⁸

今、そしてこれから見られる植物 (2021年1月10日)



大池に氷が張りました。カルガモが氷の上を歩いていたのには驚きました。よく「えべっさん寒波」と言われますが、今回の寒波はかなり強烈です。風土記の丘も珍しく雪化粧です。そんな中、冬ならではの写真を撮りました。これまでも紹介した植物ですが、雪と一緒に撮ると、格別の風情があります。



まずはヤブコウジです。万葉集にこんな歌があります。「この雪の け残る時に いざ行かな 山橘の 実の照るも見む」まさにこの写真とピッタリです。と、ひとりで悦に入っています。ヤブコウジはサクラソウ科の小さな木本（もくほん）、簡単にいうと木です。こんなに小さいのに木なんですね。



旧小早川家の庭にロウバイの花が咲いています。この木は江戸時代の初めに中国から持ち込まれたと伝えられています。花の少ない時期にいい香りを放つこの花は庭木として重宝されてきました。名前のお通り、蠟細工（ろうざいく）のような花です。名前に「バイ」とつきますが、梅の仲間ではありません。ロウバイはロウバイ科です。



この赤い実はナンテンです。子どもの頃、雪うさぎを作ると、この実を取ってきて目にしました。葉は耳にしました。もう、そんなことをして遊ぶ子どももいなくなりました。というか、和歌山市では雪もそれほど積もらなくなりましたね。ナンテンはメギ科の木で昔はほとんどの家の「鬼門さん」に植えられていました。



幹がトゲトゲだらけの木を所々で見かけます。タラノキもそうですが、このカラスザンショウも負けず劣らずトゲトゲです。その葉が落ちた跡（葉痕・ようこん）が、お猿の顔のように見えます。葉痕の観察は冬が最適です。是非探してみてください。 松下

風土記の丘の花だより⁶⁹

今、そしてこれから見られる植物(2021年1月17日)

いっとき寒さがちょっと緩みましたが、まだまだ寒い日々が続きそうです。体調管理に十分気を配りながら歩いてください。まずは「植物」と書いているのに。植物では



ないものから紹介します。これは(たぶん)コアカミゴケです。名前に「コケ」と付いていますが、コケでも、キノコでもありません。「地衣類」という仲間の生物です。茅葺屋根を覆うように生えているので、「このマッチ棒みたいなものはなんですか?」というご質問がよくあります。(たぶん)と書いたのは、私がコアカミゴケとアカミゴケの違いをはっきり分かっていないからです。頼りない話ですみません。でもこの仲間には違いありません。



ツバキの花が早くもチラホラと咲き始めました。この花を見るとまだ気が早いですが春の訪れを感じます。写真の花は、花びらがたくさんあるので、何かの品種で、自生するヤブツバキではありません。新池の北と西にはいろいろな品種の椿が植えられています。どんな花が見られるか、これからが楽しみです。



葉の裏に字を書いている左の写真はタラヨウの葉です。「葉書き」「言葉」などの「葉」の語源になったと言われる木です。大昔この葉の裏に手紙を書いて渡したということから「葉書きの木」として知られています。尖ったもので書くとすぐに文字が浮かび上がり、いつまでも消えません。試しに書いてみてください。万葉植物園に何本か植えられています。



万葉植物園北側の通路沿いにシキミの花が咲いています。まだ、右から2本目の木だけですが、これから花数が増えてくることでしょう。シキミは和歌山市ではシキビとよばれることが多く、こっちの方がなじみがあるかもしれませんね。ちょっと暗いイメージのある木ですが、花はなかなかきれいです。今回もシダの紹介はお休みです。悪しからず。松下